

あめつち みのり
『**天地の農カレンダー 2022年版 (令和4年)**』

[国際カレンダー(株)発行]

**農村に潜む
“聖なる場”を見つめて**

文：石井里津子



(H540×W375mm-13枚)

「**天地の農カレンダー**」は、日本の農村の美しい風景写真に詩的文章を添えて、農業農村の大切さや魅力を伝えるカレンダーです。みなさまに育てていただきながら、おかげさまで三年目を迎えました。

農村には “聖なる場” がある

二〇二二年の執筆テーマ(書き手だけが密かに抱き、十二ヶ月を展開させています)は、「農村は、聖なる場」「パワースポット」というもの。

書きながら意識したキーワードは「聖なる場」/「パワースポット」「幸」「福」「祈り」「願い」「希求」「エネルギー」「力」……。

一見、農業とは相容れない言葉かもしれませんが、けれども、ご存じの通り農耕は、自然との折り合いのなかで育まれ、災害とも隣合わせの営みです。とくに災害の多い日本は、古より「祈り」や「願い」とともに農業やコミュニティを維持発展させてきました。

それゆえ、農村には、自ずと「聖なる場」が組み込まれているのではないのでしょうか。たとえば、さまざまな祭りもあり。また、自然のなかに山の神、田の神、水の神などの神々を各地で見いだしているように。

農村に潜む “聖なる場” は、今も人々の営みの継続によって、自然の美しさや厳しさとともに立ち現れ、その地にしかない唯一無二の気配を放っています。

希求の精神に導かれて

さらに、農村には水を求める地域の悲願といっ

た、人々の「希求」が刻まれた場所が多くあります。「希求」とは「崇高な目標を具現したい」と願うこと(『新明解国語辞典』)。

それは、自分の生命や人生を超えて、子孫や地域全体の明日のために、石を積み、水をたぐり寄せ、労働力を惜しみなく投じた精神でもあります。その地域の希求が、人の営みと自然をあざない、風土をつくっていると感じます。

だからでしょうか。農地を歩くと、元気をもらえます。農地の手入れや創意工夫に心を揺さぶられたり、開田物語から勇気を得たり、小さな生きものに出会い、うれしくなったり。そうした経験からわたしは、農村は知られざるパワースポットなのでは!? と思っています。

これからは、マイクロツーリズムやワーケーションなど地域との新しいかわり方が根付き、農村に新たな可能性を運んでくれることでしょうか。コロナ禍で、まだしばらく閉塞感が世界を覆う日々です。それだけに「聖地巡礼」ならぬ「農地巡礼」の心持ちでひと月ひと月、小さな旅へご案内します。

二〇二二年の農村風景十二力所

一月 ● 大谷地堤のハクチョウ(新潟県五泉市)

農業用の水を湛える大谷地堤。冬期は、北から渡ってきたハクチョウたちのねぐらとなっています。古来ハクチョウは、多福をもたらす鳥と考えられています。新年、古の人々と心を重ねるように自然を捉え、心を調べてゆきたいものです。

二月 ● ストックの花畑(千葉県南房総市)

早春、雪国がまだ雪に覆われている一方、千葉・房

総半島には、花畑が登場します。歴史を調べると、戦時下には「花禁止令」が出された過去も。花が咲き誇る風景は、まさに平和の象徴。「花は幸を呼ぶ」という信念が込められた風景です。

三月 ● 讃岐平野のため池群(香川県三豊市)

香川県は、ため池が数多くあり、空海が補修したという満濃池から、伝説が残る池まで、個性ある池に出会えます。龍神伝説もあり、どの池にも人々の「水への思い」を託された龍がひっそりと住んでいてもおかしくないような地域です。

四月 ● 棚田に映る三多気の桜(三重県津市)

旧美杉村にある、国の名勝「三多気の桜」の風景です。周囲の棚田は、地元農家の心意気で開花の時期に合わせ、代かきが行われ、水が張られています。ここが水田となったのはいつからなのでしょう。美しき水鏡の背景を探ります。

五月 ● 見沼田んぼとビル(埼玉県さいたま市)

首都圏に、日本を代表する水と土の物語を持つ田んぼが残されていることをご存じでしたか。埼玉・大宮のビル群を背景に広がる田園風景。「見沼代用水物語」と題し、この



5月 「見沼田んぼとビル」(埼玉県さいたま市)

「見沼田んぼ」の歴史をコンパクトにまとめました。
六月 ● 青く輝く別府弁天池(山口県美祿市)
旧秋芳町にある別府厳島神社内「別府弁天池」は、農業用水でもあります。その水の透明な青さは、日本

最大級のカルスト台地、秋吉台が生んだもの。この青い池に漂う清涼さに包まれると、その神秘さも一緒に吸い込めそうです。

七月 ● 利尻島を望むサロベツの酪農(北海道豊富町)

もう何年も前ですが、北海道のサロベツを開拓した人たちから話を聞くために、現地に幾度も足を運びました。今は旅立たれた古老たちの話の断片から一編の詩文をつくりました。広大な牧草地には先人たちのエネルギーが潜んでいます。

八月 ● 音無井路円形分水(大分県竹田市)

「円形分水」「円筒分水」ともいう、丸い形の分水工は、日本の技術者が生んだものです。「公平さ」を希求し、具現化させたことに深い感動を覚えます。公平さを知恵と技術で解決したその姿は、機能美に満ち、現代に示唆を与えています。

九月 ● 大蔵棚田の稻杭(山形県山辺町)

天日干しをする稻杭の光景は今では珍しく、大蔵棚田では多くの人の手で保全されています。稻杭がそんな人々の姿と重なって見えたとき、棚田がスタジアムと化し、スタンディングオベーションのなか応援歌が響き渡っている気がしました。

十月 ● 赤そば畑(長野県箕輪町)

ソバ畑ながら、現代的な光景です。赤い花を咲かせるソバの品種改良を重ね、「ルビーのような赤い花」を追求し、生み出した人々がいるのです。その背景にある思



9月 「大蔵棚田の稻杭」(山形県山辺町)

いや物語を知ったならば、もつとこの光景が輝いて見えるはずですよ。

十一月 ● 三島神社 秋祭り「鹿踊り」(愛媛県大洲市蔵川)

かわいらしい鹿の面や衣装に魅了されます。大洲市蔵川の棚田に囲まれた三島神社。ここの秋祭りでは六ツ鹿踊りが奉納されます。祭りの総代の方から話をお聞きしました。維持の難しさがありながらも、風土も伝統文化も人も魅力的な地域です。

十二月 ● 大根やぐら(宮崎県宮崎市田野町)

まるでトンネルのような巨大なやぐらを組み、漬物用の大根を干す光景が南九州エリアの風物詩となっています。日本農業遺産にも認定されました。一年を締めくくる師走。コロナ禍を抜け、青空に向かって駆け出すイメージで作成しました。

◎「天地の農カレンダー」を御購入される方は、国際カレンダー(株)(電話03-5829-4100)にお問い合わせ下さい。

また、本誌では二〇名様にプレゼント致します。ご希望の方は、「天地の農カレンダー」希望として、官製はがきまたはメールにて88ページの宛先まで住所、氏名、性別、年齢、職業、勤務先を記入し申し込んで下さい。

PROFILE

石井里津子(いしい・りつこ)

佐賀県生まれ・香川県育ち。20年以上にわたり、全国の農村取材し、地域文化・農業に関する執筆活動を続けている。編著に『棚田はエライ』(農文協刊)、著書に『千年の田んぼ』(旬報社刊)(第64回青少年読書感想文全国コンクール 中学校の部課題図書)、近著に『うちにカブトガニがやってきた!』(学研プラス刊)がある。

